

特別講義のお知らせ

Старший научный сотрудник ИВР РАН

Светлана Ивановна Марахонова

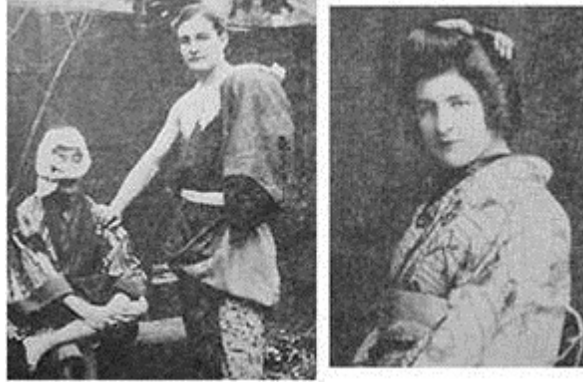
スヴェトラナ・マラホーノヴァ氏

ロシア科学アカデミー東洋学古文書研究所上級研究員

С.Г. Елисеев в Петрограде в 1914-1920

(по материалам Архива востоковедов Института восточных рукописей РАН)

ペトログラードのエリセーエフ：1914年～1920年



日本留学時代のエリセーエフ

日時 2012年11月9日（金） 午後4時40分～6時20分

場所 東京大学文学部(本郷キャンパス)3号館7階 スラヴ文学演習室

住所：〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

交通：地下鉄丸ノ内線・大江戸線「本郷3丁目」、南北線「東大前」などから徒歩10分

*ロシア出身の世界的な日本研究者、エリセーエフが西側に亡命する前、革命前後のペトログラードでつけていた日記などの未公開のアーカイヴ資料に基づく貴重な報告です。**講義はロシア語で行われ、通訳はつきませんので予めご了承ください。**東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学専門分野の大学院演習の一環として行うものですが、専門的関心をお持ちの皆様のご来聴を歓迎します。



講師のプロフィール スヴェトラナ・マラホーノヴァ氏は、レニングラード東洋学部卒業後、ロシア科学アカデミー東洋学研究所の大学院で学ぶ。元来の専門はエジプト学で、コプト語文献の研究の業績がある。最近ではロシア科学アカデミー東洋学古文書研究所（サンクト・ペテルブルク）に所蔵されている東洋学者関係のアーカイヴを利用して、ペトログラード時代のセルゲイ・エリセーエフの研究を行っている。今回は国際交流基金の日本研究フェローとして来日、調査を行っている。

問い合わせ先：東京大学文学部スラヴ文学研究室 電話03-5841-7955

セルゲイ・エリセーエフについて

セルゲイ・グリゴリエヴィッチ・エリセーエフ（Сергей Григорьевич Елисеев, 1889-1975）は、ロシア出身の日本学者。サンクト・ペテルブルクのネフスキー通りとモスクワのトヴェルスカヤ通りに有名な高級食料品店を構える「エリセーエフ商会」の富豪の家に生まれた（両首都の店は、ロシア革命後、国家に接収されてからも、国営食料品店として存続し、非公式には「エリセーエフの店」と呼ばれ続け、現在に至っている。特にモスクワの「エリセーエフの店」〔トヴェルスカヤ通り14番地〕は、今でもモスクワ随一の高級食料品店として繁盛し、モスクワの名所の一つとなっている）。

セルゲイ・エリセーエフは明治末期に日本に留学、東京帝大文理科に正式な入学を認められた最初の外国人となった。同学科を優秀な成績で卒業し、日本滞在中に夏目漱石を初めとする日本の文人たちと親しく交わった。漱石が彼に献呈した句は「五月雨やももだち高く来る人」。

エリセーエフは人並み外れた能力を発揮して日本語を習得し、日本文学・芸術に驚くほど深く通じた不世出の天才であり、本格的な日本研究はまだこれからという段階の当時の欧米全体を見渡しても、彼

ほどの日本通は稀だった。ロシア出身のほぼ同世代のニコライ・コンラッド、ニコライ・ネフスキーとともに日本研究の偉大な先駆者として歴史に名前を残す大きな存在である。彼らの運命は三人三様で、ネフスキーはスターリン時代のソ連で粛清され、コンラッドはソ連で生き延びて科学アカデミー会員までになった。他方、裕福な商家の出身のエリセーエフはロシア革命後ソ連にとどまることができず亡命し、フランス（ソルボンヌ）およびアメリカ（ハーヴァード）における日本研究の基礎を築いた。

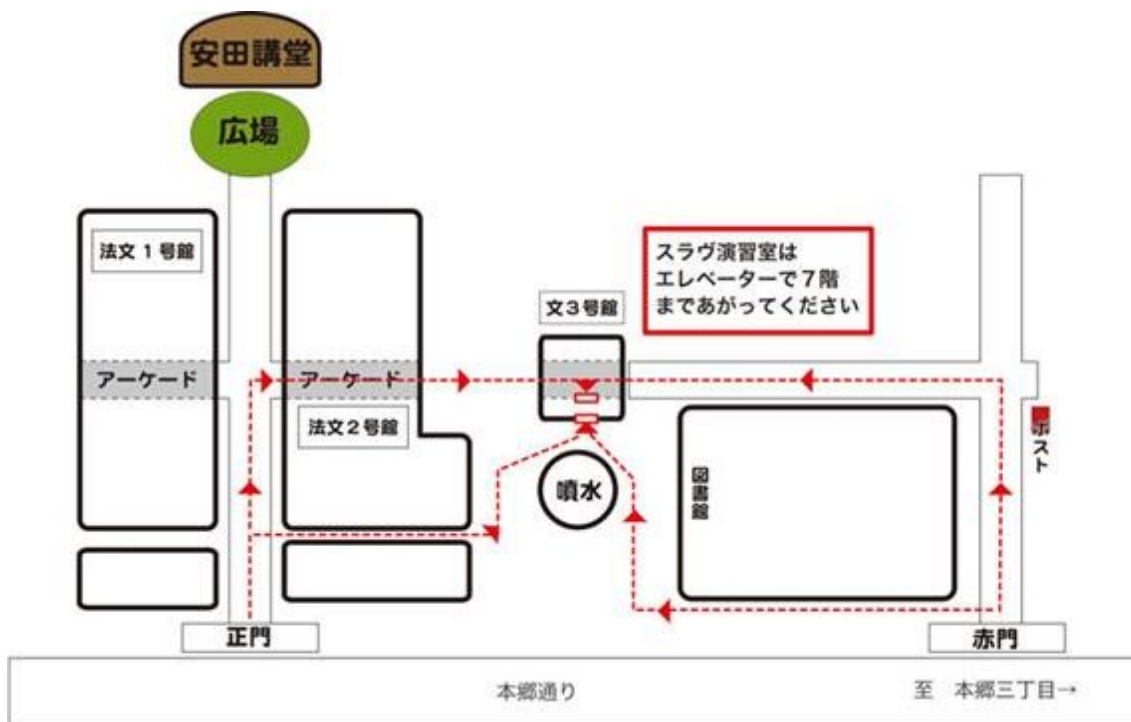
後に日本大使も務めたライシャワーはエリセーエフのハーヴァードにおける門下生の一人。一方、同じく教え子の一人、ドナルド・キーンは彼の授業や学問に対して強く否定的な評価を下しているが、このあたりに、先駆者として日本の美の世界を発見し、そこに自由に遊んだロシア人と、その後より精緻な研究の道に突き進んでアカデミックな日本文学研究を確立したアメリカ人の姿勢の食い違いがはからずも鋭く出ているようでもある。それは欧米の研究者による日本に対する関わり方の転換を端的に示すものでもあった。

エリセーエフがみずから見事な日本語で書いた著作としては、ロシア革命から、投獄、迫害、亡命にいたる数年間の体験を記録した『赤露の人質日記』（1921年）があり、これは非日本人による日本語文学の先駆的な試みとしても貴重である。

評伝としては、倉田保夫氏による『エリセーエフの生涯』（中公新書、1977年）という先駆的な著作がある（同氏著の『夏目漱石とジャパノロジー伝説—「日本学の父」は門下のロシア人・エリセーエフ』〔近代文芸社、2007年〕はそれをもとに書き直したもの）。ロシアでは、ソ連時代に亡命者として無視されたこともあって、彼の業績はほとんど認知されることがなかったが、2000年には「エリセーエフと世界の日本研究」という国際学会議が行われてその報告集が出版され、再評価の機運が高まってきた。

しかし、ロシア・日本・フランス・アメリカにまたがって波瀾の時代を生きて精力的に活動し、日本語・ロシア語・フランス語・英語で様々な著作を残した彼の全体像を把握し、彼の仕事が日本学にとってどのような意味を持ったかを学術的に再評価するのは、容易なことではない。今後の研究者に委ねられた大きな課題であろう。（沼野充義）

東大(本郷キャンパス)構内地図



Мицүёси Нумано
Mitsuyoshi Numano
沼野充義
